

9才男子で両側冠状動脈の動脈瘤とその末梢の極度の狭小化を認めた患児で、数日前狭心痛を訴え、安静時心電図のV₅₋₆でSTが0.5mV下降していたのに、double two step testは陰性であった。それより1カ以内で、再び狭心痛を訴え、他病院に入院、著明なST下降を認め、その晩死亡した。運動負荷量の検討を要すると思われた乳幼児では負荷方法の開発を要する。

⑤ MCLS 急性期又はその後の経過観察中に18%の頻度で異常Q波が出現した。出現時期は第8病日から

病後11カ月目に亘っていたが、殆んどは8~30病日に出現した。出現場所はII III aV_Fに最も多く、他にaV_L, V₁, V₅₋₆にもみられた。1例を除いた全側冠状動脈瘤を認め、これは冠動脈瘤を呈したMCLS患者の50%に当たった。例外の1例は極度の狭小化を示したものであった。II III aV_Fに異常Q波を認めたものは右冠状動脈の血行障害が強度であり、aV_Lの場合は左前下行枝の障害が強度であった。Q波出現時自覚症状を示したのは1例のみで、病後11カ月目のものであった。

川崎病罹患後の冠動脈変化

班 員	東京女子医大小児科	草 川 三 治
研究協力者	東京女子医大心研外科	遠 藤 真 弘
共同研究者	東京女子医大心研小児科	高 尾 篤 良
	〃	森 克 彦
	〃	河 林 司

川崎病の診断基準により診断された症例で急性期の症状が重篤な経過を示した例、経過中の検査値の正常化の遅延した例、罹患後遠隔期に心電図異常、心雑音の聴取された症例に選択的冠動脈造影を施行した。

症例は45例で、男26例、女19例であった。45例中17例に冠動脈変化(Coronary Artery Involvement)があり、38%を示した。

性別でみると男26例中11例(42.3%)、女19例中6例(31.6%)で僅かに男性例で冠動脈変化が多くみられた。

川崎病罹患時年齢は、3カ月から7才(中間年齢2才5カ月)であり、罹患時年齢と冠動脈変化には特に有意の所見は認められなかった。(図1)

更に、川崎病罹患から冠動脈造影までの期間と冠動脈変化をみると、選択的冠動脈造影は、罹患後1カ月から

7年で施行しているがこれでも有意の所見は得られなかった。(図2)

17例の冠動脈異常例の最終胸部レントゲン、心電図を検討すると、両者ともに正常所見を示す症例が6例(35.3%)あった。6例は、最終心電図で小児判定肥大基準による判定でも肥大所見はなく、異常Q波(II, III, aV_F, 胸部誘導)も認められず、T波の平低化、陰性化、著明な増高もなかった。これら6例の心胸郭比は43%~51%と心拡大はなく、石灰化像肺血管陰影異常もなかった。冠動脈造影施行の適応は、川崎病罹患後の最終胸部レントゲン、心電図で正常範囲内にあるものでも、川崎病罹患時の状態をよく問診し、重篤例では、冠動脈造影の施行の必要を強調したい。

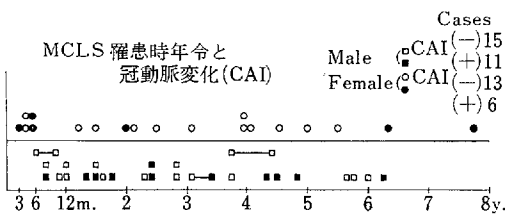


図 1

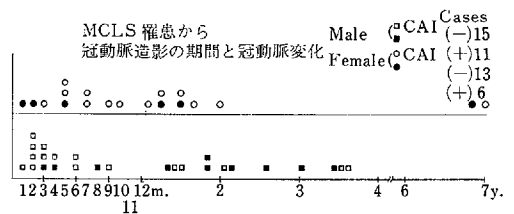


図 2

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

川崎病の診断基準により診断された症例で急性期の症状が重篤な経過を示した例、経過中の検査値の正常化の遅延した例、罹患後遠隔期に心電図異常、心雑音の聴取された症例に選択的冠動脈造影を施行した。

症例は45例で、男26例、女19例であった。45例中17例に冠動脈変化(Coronary Artery Involvement)があり、38%を示した。